

## 吉村誠司 展

### 硝子を透して

【会期】 11月14日(水)～11月20日(火)

【会場】 そごう神戸店 新館7階=美術画廊  
神戸市中央区小野柄通8-1-8

☎078 (221) 4181

\*ギャラリートーク 11月18日(日)午後2時から



よしむら・せいじ

1960年福岡県生まれ。85年東京藝術大学美術学部絵画科日本画専攻卒業、サロン・ド・フランタン賞。86年東京セントラル美術館日本画大賞展優秀賞、春の院展初入選。87年院展初入選。88年有芽の会会務大臣賞。90年東京藝術大学大学院美術研究科博士後期課程満期修了。96年院展日本美術院賞・大観賞(98年)。2000年春の足立美術館賞(05年)、日本美術院同人推挙。07年院展文部科学大臣賞。10年院展内閣総理大臣賞。11年院展足立美術館賞、共同通信社配信「随想」挿絵担当。現在日本美術院同人、東京藝術大学教授。



「陽昇」20号P



「サンゴ」4号P



「南国の朝」15号P



「長閑」10号P

現在東京藝術大学大学院第三研究室の教授として教鞭を執る吉村誠司。前田青邨、平山郁夫、福井爽人、手塚雄二と日本画の巨匠たちによって受け継がれてきた研究室である。早くからその実力を高く評価されてきたが、今年初めにデパートでは初めての個展を開催し大きな反響を呼んだ。吉村が2012年に制作について簡潔に表した言葉を紹介する。

「絵画を制作することはその表現以前に、物の観察と創作が必要になります。観察は、スケッチなど自然の物から得られる絵画の根源。創作は、周りの環境・経験による自分の心・考え方等の勉強によつて養われたものになります。勉強とは、いろいろな表現制作を試みることで過去の様々な作品を知ることです。(中略) 見て知ること、心の引き出しが増えていきます。創作の基本は過去の絵をまねるのではなく、今までにない世界(自分の世界)を築くことです。ほとんどやりつくされ、何もできないように思うと同時に無限にあつてどうしていいかわからなくなります。スケッチと自分のイメージにより、また心の引き出しを頼りに制作することがオリジナルになっていくと信じています」(東京藝術大学付属図書館「図書館だより」第26号より抜粋)

歴史の重みを持つ日本画の伝統にしっかりと根ざしながら、自身の絵画制作に正面から向き合った正直な言葉である。大作からSMまで出品される今展では新作30余点が展覧される。

(編集部)